

## ご挨拶と執筆者紹介

大原 まゆみ

私こと大原まゆみは、二〇二〇年三月をもって明治学院大学文学部芸術学科の教授を定年退職いたしました。その際、恒例になっていた最終講義に代えて、仕事仲間である美術史研究者の中から十名の方々にも一緒に登壇いただき、『歴史の中の美術』と題する小講演集を企画しました。題名は、美術もまた歴史とともにあり、そのコンテクストに置くことで、時代性もそれを超える輝きもより深く理解される、という企画者の信念によっています。この催しは三月七日に行なわれる予定でしたが、コロナ禍の第一波が急速に拡大する時期に当たったため、やむなく中止を決断いたしました。

その後、講演が行われた場合に掲載していた、だくことを考えていた明治学院大学文学部紀要『言語文化』に、小論文集として特集を組んでどうかというお話を、言語文化研究所からい

ただき、講演を予定されていた皆様に改めて声を掛けたところ、八名の方々がご快諾をいただきました。喜多崎親さん、野田由美意さんは残念ながら都合がつかせませんでした。司会として参加予定だった佐藤直樹さんが改めて小論文を提供して下さることになり、ここに誌上の十本の講演集として復活する運びとなりました。所長の斉藤綾子さん、事務担当の伊東絢さんに、心より御礼申し上げます。

また、紀要の刊行される直前の三月二十一日には、ウェブ上でのシンポジウムも行なわれます。そちらには新関公子さんと秋山聰さんは残念ながら出演されませんが、野田さんが復帰されることになっています。企画と準備の労を取られた平川佳世さん、青山愛香さん、岩谷秋美さんのお三方には、この場を借りて篤く感謝申し上げます。

執筆者の皆様は、これまで明治学院大学文学部芸術学科の西洋美術史コースが主催するシンポジウムや、文学部講演会でお世話になった方々です。今回は退職記念ということで、通常のシンポジウムのように統一テーマを掲げずに、今関心のあることを小論文にさせていただいています。伝統的な美術史の枠を超えた比較宗教学に向かう論考もあり、全体としての方向性を要約することが難しいので、少々安易ではありますが、対象の年代順に従って掲載順を決めさせていただきました。いずれも豊富な業績と名望をお持ちの方ばかりなので、今回は私個人との関係を主にして紹介させていただきます。

**新関公子氏**（東京藝術大学名誉教授）…私が長い留学を終えて帰国後、最初に短期勤務した横浜市民文化室の美術館開設準備の部署で知り合いました。東京藝大では（歴史・哲学系の）芸術学科でも、最近までは入試に実技試験があったためか、私の出身校である東京大学とは毛色の違った豪快なタイプの方々結構多かったのですが、新関さんはまさにそれで、頭が切れ、事情通で、かつ歯に衣着せぬ方であるため、準備中の横浜美術館が最初の館長予定者の死去により迷走していた時に、「使いくそうな」学芸員予定者数名が解雇されるとい、前代未聞の騒動の犠牲者となりました。しかし、その後のご活躍はめざましく、美術と文学を股にかけ、知り尽くされ語り尽くされた

と思われたところに、丁寧な資料調査と洞察力によって新しい知見を次々と切り開き、そのうちの一冊『ゴッホ 契約の兄弟』（ブリュッケ、二〇一一年）で、二〇一二年度吉田秀和賞を受賞されました。近著の歌麿と写楽同一人物説は、一見びっくりですが、この件に限らず、反対意見をお持ちの方は、ただ無視したり「違うと思う」の一言で片付けるのではなく、どうぞ学説としてお出しく下さい。それが美術史学を鍛え、深化させる唯一の道です。明治学院大学では、講演会と授業双方でお世話になっていきます。

**小林頼子氏**（目白大学名誉教授）…言わずと知れたフェルメール研究者。やはり私が帰国して間もない時、美術史学会の例会でテル・ブリュッヘンの研究発表を伺い、その後の質疑応答を聞いて、頭よさに感服したのが彼女を知ったきっかけです。大著『フェルメール論 神話解体の試み』（八坂書房、一九九八年）と小著『フェルメールの世界』（Zエヌブックス、一九九九年）で、二〇〇〇年度吉田秀和賞を受賞されました。明治学院大学では、単独でフェルメールについて講演していただいたほか、二〇一三年のシンポジウム「植物を描く／植物で描く」のゲスト発表者としてもご協力いただきました。今や二人とも定年後で近間に住む身です。そのうち多摩川・鶴見川沿岸美術史研究団ができるかもしれません。

**保井亜弓氏**（金沢美術工芸大学教授）…ご夫君であるイタリア美術史研究者の故・上村清雄さんの方が知り合うのは早かつ

たので、学会でのご発表を伺った時、ドイツ美術史を研究する細身でクールな美女と「豪快系」の上村さんとの組み合わせに、夫婦の妙を感じたのを覚えています。その後、版画研究で地歩を築き、頼もしい存在となりました。二〇〇三年に同僚の鈴木杜幾子さんと、芸術学科美術史学系列では最初のシンポジウム『戦争と記憶』を開催した際、発表者の一人にお招きして以来、シンポジウムの常連としてご協力いただき、二〇一五年のシンポ『創造・伝達・記憶の場としての版画』では企画・人選の中心を担っていただきました。

平川佳世氏（京都大学大学院教授）…一九九八年の夏、故・中村俊春さんのお招きで京都大学・大学院で集中講義をした際、世話係を務めてくれた助手が平川さんでした。その時の講義は、中村さんに言わせると「えぐい」内容の両大戦間ドイツ美術で、「普段あまり近代美術史に接していない学生は、強烈な刺激を受けた」そうです。でも、「えぐい」ことばかりをやっていたわけではなく、戦前までは使われていて、ドイツ語圏の歴史や文学を研究する者には必須のスキルである「ドイツ文字の読み方・書き方」を、なんとか将来の研究者候補たちに伝えようと、特別授業をコマ設けていました。その価値をいち早く認識した平川さんから、「私の宝物です」と言っていたのを思い出します。美術史学では、女子学生の方が多いのに有利な職を得るのは男子、という性差別が横行していましたが、外野に有無を言わせぬご活躍で、主要大学では初めて女性の西洋美術

史学教授となり、早世された中村さんの遺著を海外で出版するという大任も果たされました。やはり明治学院大学でのシンポジウムの常連です。

秋山聰氏（東京大学大学院教授）…美術史界での東京大学卒の男子としては型破りな方です。「東大卒の男子」であるだけで就職には困らないため、留学しても学位を取るわけでも論文を発表するでもなく、一、二年で帰国し、順調に就職する男性が多かった中で、フライブルク大学で博士号を取得。デューラー研究から始められ、死生学の国際研究にかかわる中で、東西比較を含む宗教と美術との関係へと対象を広げられています。『聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の生成と造形』（講談社、二〇〇九年）では、聖遺物と美術の関係という視点を提示され、同年のサントリー学芸賞を受賞されました。今後どんな方向に進まれるのか、注目されます。明治学院大学では、聖遺物に関する単独講演をしていたばかり、二〇一〇年開催のシンポジウム『デューラー受容史五百年』での発展的コメントーターをお務めいただきました。

佐藤直樹氏（東京藝術大学准教授）…私よりはかなり若い世代なのですが、国立西洋美術館にお勤めの頃から何かと接点があり、前川誠郎先生がお亡くなりになった時に、直接間接に恩を受けている者として何かしよう、という話になり、共同でシンポジウム『デューラー受容史五百年』を企画・開催しました。彼が近世、私が近現代の受容を担当し、多くの協力者を得て、

よいコラボレーションができたと思っています。その後、佐藤さんは近代にも対象を広げて研究を行なっており、今回のコロナウイルス研究はそうした成果のひとつです。豪快さと繊細さを併せ持ち、幅広い人脈をお持ちなので、青山さん、岩谷さんとは、彼の仲介でネットワークが繋がりました。

青山愛香氏（獨協大学教授）…佐藤さんのご紹介で、『植物を描く／植物で描く』で初めて、「二緒し、二〇一八年のシンポジウム『ドイツ美術とプロテスタンティズム』」で、まさに宗教改革進行中の表現を対象とする発表を、再び担っていただきました。その時の口頭発表と、文章化されたものはかなり違っているのですが、後者では「言葉と美術」の視点が格段にわかりやすくなっているので、シンポジウム発表だけをお聞きになった方は、ぜひ活字化されたものも読むことをお勧めします。『デューラーの遍歴時代・初期素描の研究』（中央公論美術出版、二〇〇九年）で第二十三回辻社・三浦アンナ記念学術奨励金受賞。日本語・ドイツ語のバイリンガルという点でも、頼もしい存在です。

尾関幸氏（東京学芸大学教授）…一九九四年度に東京大学・大学院の非常勤講師を務めていた時、留学を控えた学生である尾関さんと知り合いました。ベルリン自由大学で博士号を取得。正確な透視画法を駆使する建築家兼画家として、ベルリンではよく知られているヨハン・エルトマン・フメルが研究対象だったのですが、日本では知名度の低い画家であるため、少し損

をされているかもしれません。アカデミズムやナザレ派研究に力を入れていらつしやう、『デューラー受容史』でナザレ派の担当をお願いしました。ドイツ語堪能で、国際シンポジウムをほとんど独力で開催されています。

岩谷秋美氏（東京藝術大学助教）…一番若い方ですが、経験・意欲ともに豊富な中世建築史（だけではない）研究者。やはり佐藤さんのご紹介で、『植物を描く／植物で描く』で初登場。『版画』と『プロテスタンティズム』でも、こちらの要請に応えて、しっかりとした発表を提供していただきました。『ウィーン シュテファン大聖堂・ゴシック期におけるハプスブルク家の造形理念』（中央公論美術出版、二〇一七年）で第三十一回辻社・三浦アンナ記念学術奨励金受賞。隠れた才能として、建築物の写真撮影があり、『言語文化』三〇号に提供してくれたアンナベルクの聖マリア教会の一枚は、印象的な表紙となりました。

（先頭に近い方々の紹介の長さ比べ、後の方が短くなつてしまったのは、ひとえに締め切りに追われる筆者の責任であり、紹介される側の軽重とは関係のないことを明言いたします。）